

展覧会のお知らせ

■常設展示

「小川原脩展 土着と風土」

会期：開催中～7月10日（日）

「小川原脩のラダック」

1983年、小川原はインド北部・西チベットのラダック地方を旅しました。空と大地、人々の信仰に生きる素朴な暮らし。そこで出会った光景は、その後の創作に大きな影響を与えました。ラダック旅行以降の作品を中心にご紹介します。

会期：7月16日（土）～10月16日（日）

■企画展示

「嶋貫由紀子展 Flower kings 花の王さま」

会期：開催中～7月10日（日）

「しりべしミュージアムロード共同展 いろとかたちのシンフォニー」

岩内・共和・倶知安・ニセコに点在する5つのミュージアムの共同企画展です。美術と音楽は、互いにインスピレーションを与え合う関係でもあります。絵画や文学の作品に散りばめられた、リズムやメロディー、いろとかたちがかなでるシンフォニーを発見してみませんか。

小川原脩記念美術館テーマ「奏でるカタチ」

会期：7月16日（土）～8月28日（日）

【関連イベント】

ミュージアムロード・コンサート 7月16日（土）10時～11時

出演：コンセル・アミ（テノール、ヴァイオリン、クラリネット、ピアノ）

会場：当館ロビー（無料 ※展覧会の観覧には観覧料がかかります）

アート・イベントのお知らせ

■土曜サロン

「ピカソと小川原脩」

20世紀最大の画家ピカソ。次々と新しい世界を切り開くピカソの作品は、世界中の人々を魅了しました。学生時代、東京で実際に作品を見た小川原も、強い衝撃を受けています。

日時：7月23日（土）14時～15時

講師：柴 勤（当館館長） 会場：当館映像ルーム 聴講無料

夏休みワークショップ

「むつ先生と絵あそびしよう！①ゴシゴシ・さらさら・カーテンのできあがり」

札幌在住の美術家・宮崎むつさんが、楽しい絵あそびを教えてくれる人気のワークショップです。

日時：7月30日（土）10時～15時30分

（参加無料、申込不要）

※時間内にいつでも参加できます。



むつ先生のワークショップの様子（昨年）



小川原脩記念美術館 倶知安風土館

☎ 21-4141

☎ 22-6631

開館時間は9時～17時

（入館は16時30分）

7月の休館日

5日、11～15日、19日

※夏休み期間（7月20日～8月15日）は休まず開館します

美術館から

「しりべしミュージアム・ロード」の5館共同企画展、今回の共通タイトルは「いろとかたちのシンフォニー」、つまり「美術と音楽」がテーマです。具体的な内容に関しては、各館が独自に工夫を凝らし、当館は「かたち」、木田金次郎美術館は「いろ」、西村計雄記念美術館は「線」、また有島記念館は芸術家を輩出した「有島一族」、膨大なピカソ版画を有する荒井記念美術館は「画家ピカソ」に着目するといった具合。さらに、展覧会のオープン当日と翌日にかけて、4会場にコンサートが巡回します。美術と音楽、展示室内と外で大いに盛り上がってくれると嬉しいのですが、どうぞ、お楽しみに。

館長 柴 勤

海と山と田園とーミュージアムロード情報ー

【クローズアップ】

今年も「しりべしミュージアムロード共同展」の季節がやってきました！各館それぞれの「いろとかたちのシンフォニー」をお楽しみください。

会期：7月16日（土）～8月28日（日）

■西村計雄記念美術館「線のリズム」

☎ 0135-71-2525

■木田金次郎美術館「色彩のコラージュ」

☎ 0135-63-2221

■有島記念館「有島一族と音楽」

☎ 0136-44-3245

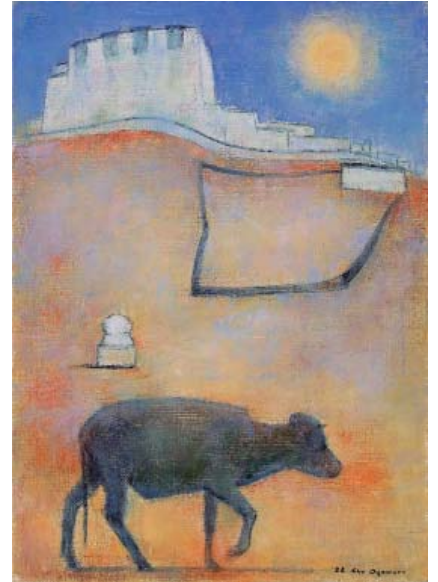
■荒井記念美術館「人生賛歌」

☎ 0135-63-1111

感動一点 の場

『ゴンパと牛』

1986年 小川原 脩 画



ラダックという所をご存じだろうか。インド北部のジャンムー・カシミール州に属し、ヒマラヤ山脈とカラコルム山脈に囲まれた平均標高 3500 m の山岳地帯。チベット仏教文化が色濃く残る「西チベット」と呼ばれる地域である。空気は薄く、岩肌がむき出しの大地はよく月面に例えられる。万年雪の山々から流れ来る川、谷筋に集落が点在し、夏には川沿いに緑が生い茂る。そして冬は、マイナス 20 度まで下がる厳しい気候、峠を越える陸路は使えず、閉ざされた世界となる。

1981 年、82 年に中国チベット自治区を訪れた小川原であったが、人々の祈りの姿に圧倒される一方、外国人の入国が増え、文化大革命の影響もあり、観光地化した都市の姿に落胆もしていた。その翌年、チベット仏教文化の原型を求めて、ラダックへと向かう。そこでは、人々は信仰心に篤く、ヤク、ヒツジ、そして牛といった家畜と共に、農耕をして素朴に暮らしていた。集落の小高い丘にはチベット仏教のゴンパ（僧院）、そして無数のチョルテン（仏塔）が建ち、石を積んで作られたカルカ（家畜囲い）があった。

空と太陽、白い僧院と家畜囲い、仏塔と子牛。この作品は、小川原脩のラダックそのものなのだろう。

文：沼田 絵美（小川原脩記念美術館 学芸員）

ふる探訪 さと

—ウグイスのさえずり—

400 回

高山の雪も消え、緑が山頂を覆う。高い空、爽快な風、美しい草花、そして何よりも広い空間。夏山の季節の到来である。ニセコ登山のバックミュージックはウグイスのさえずりだ。なんと豪華ではないか。

それほどまでにウグイスの声を耳にする理由はなにか。ひとつは、ササが豊富なためだ。ササ藪はウグイスにとって巣作りに絶好で、ニセコの山々はササ、より正確にはチシマザサに覆われ尽くしている。そして、チシマザサの分布や多寡は多雪と深い関係がある。積雪に深く被われることで新芽が厳冬期の低温から守られるからだ。多雪がササ藪を、そしてササ藪がウグイスを育む。かくしてニセコの山々にウグイスの美声が響き渡るのである。

さて、野鳥は繁殖のため、多くは早朝にオスがさえずる。ところが、ウグイスのさえずりは午後になっても、さらに繁殖期のピークが過ぎても聞こえてくる。これにはウグイスなりの事情がある。



チセヌプリから西を眺める。
中央はシャクナゲ岳。
チシマザサがピロード状に全山を覆う

ウグイスは1羽のオスが複数のメスに巣作りをさせる。いつも新たなメスを引き入れるために、オスは甘い言葉をメスに投げかけるのだ。普通のホ～ホケキョはメスを呼ぶ声。低いホ～ホホケキョというのは縄張りに侵入したオスを追っ払うとき。そしてケキョケキョケキョという俗に谷渡りと呼ばれる鳴き方は、縄張り内でヒナを育てているメスに対して注意を促す警戒音なのだが、実際には登山者の姿に反応して発していることが多い。

少数のオスが多数のメスを占有する裏には、大多数のモテないオスの存在がある。彼らは必死にラブソングでメスに訴えかけるしかない。かくしてウグイスの甘言と悲訴とが一緒くたになって山々に響きわたる。えらいこっちゃ。

文：岡崎 毅（倶知安風土館館長）